

フランス語代名詞の前置について

——機能主義的観点から——¹⁾

石野好一

0. はじめに

本論文は、フランス語における補語代名詞 (clitiques) が動詞に前置される現象のしくみと理由を説明することを目的とし、そのためにプラーグ言語学派とハーバードの機能主義研究者²⁾によって提唱された「情報 information」や「共感 *empathie (empathy)*」の概念が有効であることを示そうとするものである。

1. フランス語における動詞補語代名詞の前置——問題提起

SVO 言語であるフランス語は、英語同様、ふつうは目的補語を動詞の後に置く。しかし、それらが代名詞化されると、動詞の前に置かれることになる。

- (1) a. Je mets *ce tableau* sur le mur.
- b. Je *le* mets sur le mur.

他方、英語ではこの代名詞前置の現象は起こらない。ただし、同じラテン語から派生したスペイン語やイタリア語などのロマン諸語では一般的な現象である。

- (2) a. Je *t'aime* beaucoup.
- b. = *Ti amo* molto. (イタリア語) (伊藤太吾, 2006, p. 174)
- c. = *Te quiero* mucho. (スペイン語) (伊藤太吾, 2006, p. 174)
- d. *te ajut* (ルーマニア語) (= je t'aide) (Popovici, 2014, p. 306)

さらに、前置される代名詞が2つ以上あるとき、その語順には一定の規則がある。

- (3) a. *Je le lui donne.* 《直接目的 *le* + 間接目的 *lui*》
b. **Je lui le donne.*³⁾ 《間接目的 *lui* + 直接目的 *le*》

フランス語では、(3a) のように、2つの代名詞が3人称の場合、《直接+間接》の順なら言えるが、(3b) のように逆は言えない。

しかし、この点については、イタリア語やスペイン語などでは、フランス語と同じにはならない。

- (3) c. *Glielo do.* (イタリア語) (= *Je le lui donne.*) (同上)
d. *Se lo doy.* (スペイン語) (= *Je le lui donne.*) (同上)
e. *mi-l dai* (ルーマニア語) (= *tu me le donnes*) (Popovici, 2014, p. 307)
f. *i-l dai* (ルーマニア語) (= *tu le lui donnes*) (Popovici, 2014, p. 307)

フランス語以外の3言語の平叙文では、いずれも語順は逆に《間接+直接》(《与格+対格》) となっている。またラテン語でも《ILLI ILLUM》となり、同じく《間接+直接》となる。

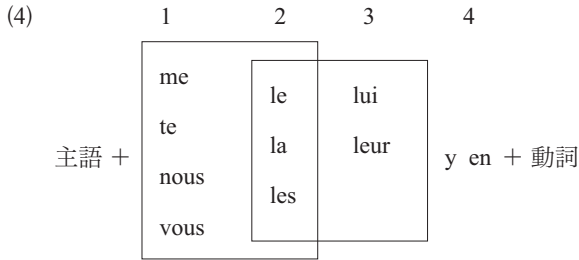
このように、2つの目的補語代名詞の語順は、他の3つのロマン諸語と同一ではなく、またラテン語の語順からも説明できない。つまり、フランス語独自の説明が必要であることが分かる。そこで、本論では、次のように問題提起をしたい。

1. なぜ、フランス語には目的補語代名詞を動詞の前に置くという規則があるのだろうか。
2. なぜ、フランス語では2つ以上の補語代名詞を並べるとき、次節で述べるような語順になっているのだろうか。

2. 先行研究

2.1. 伝統的な図式

伝統的に、フランス語の代名詞の順序は次のように図式化されている。



これらの代名詞を複数用いるときは、この1→4の語順を無視することはできない。

- (5) a. Elle *nous en* parle souvent.
 b. *Elle *en nous* parle souvent.

これらの1～3の枠から代名詞を用いるためには、(パラダイグム [選択関係] を構成している) 各枠から1つだけ代名詞を選ばなければならない、また1～3については隣り合った1つずつ、計2つしか用いることができない。(そのうえで、4枠はy-enの順に、1つまたは2つ追加できる。)

- (6) a. Elle *te le* donnera.
 b. *Elle *le te* donnera.
 c. *Elle *te lui* a présenté.

2.2. Dubois & Lagane (2001)

Duboisらは、代名詞化する場合、2つの補語人称代名詞には、次のような語順の原理があるという。以下、Dubois & al. (p. 150) より。

1. どちらも第3人称なら、前置詞によって導入された名詞句を表す代名詞が動詞に近くなる。

- (7) a. Pierre lit le journal *à sa mère*. → Pierre le *lui* lit.
b. Pierre prête ses livres *à son frère*. → Pierre les *lui* prête.

2. 一方が第3人称、他方が第1か第2人称なら、反対に、動詞寄りになるのは前置詞なしの名詞句を示す代名詞である。

- (8) a. Pierre me donne *les livres* → Pierre me *les* donne.
b. Pierre te donne *ces livres* → Pierre te *les* donne.

3. ただし、一方が *y* か *en* なら、これが動詞寄りになる。

- (9) a. Pierre m'envoie *à Paris*. → Pierre m'*y* envoie.
b. Pierre m'avertit *du danger*. → Pierre m'*en* avertit.

前述の伝統的図式も Dubois らの原理も、代名詞の語順を記述しているものの、なぜそういう語順になるかということは説明していない。

これを説明するために、我々は、機能主義の観点から、「情報」と「共感」の概念を導入する。

3. 情報

3.1. 新情報 vs 旧情報

通常、1つの文は2種類の情報を含んでいる。すなわち、聞き手にすでに知られている情報と、聞き手が知らない情報である⁴⁾。前者を「旧情報」、後者を「新情報」という。

しかし「字義通りの意味」とは異なり、何が新情報で何が旧情報かという、文の「情報構造」は常に一定で唯一とは限らない。たとえば次の文には、いく

つかの情報構造を与えうる。

(10) Jeanne écrit une lettre à ses parents.

すなわち、もし(10)が、「Jは何を書いているのか」に対する返事だとする
なら、

(10') Qu'écrit Jeanne ? — Jeanne [Elle] écrit une lettre à ses parents.

(10')は「Jが何かを書いている」« Jeanne écrit quelque chose »ことを旧情報
として、新情報は「両親への手紙」« une lettre à ses parents »ということになる
だろう。

またもし質問が「Jは何をしているのか」なら、

(10'') Que fait Jeanne ? — Jeanne [Elle] écrit une lettre à ses parents.

(10'')の旧情報は「Jが何かをしている」« Jeanne fait quelque chose »ことであ
り、新情報は「両親に手紙を書いている」« (elle) écrit une lettre à ses parents »
ということになる。

さらに、「何が起きているのか」が質問なら、

(10''') Qu'est-ce qui arrive ? — Jeanne écrit une lettre à ses parents.

(10''')の旧情報は「何が起きている」« Quelque chose arrive »ことであり、
「字義通りの内容」全体が新情報となろう。この場合、旧情報は形式的には明
示されていない。

このように、どのような質問を前提としているかによって、情報構造は異な
る。(10''')のように、旧情報が必ずしも文の具体的な一部に対応しているとは
限らないが、いかなる文も何か前提とするものを持っている。この前提とする

ものが旧情報であるといってもよい。

多くの場合、旧情報を「前提 *présupposition*」と呼ぶことも可能である。それに対応する用語として、新情報を「焦点 *focus* (*foyer*)」ということがある。また、我々は、しばしばすでに話したこと、前提としたことを話のテーマにするため、旧情報が「テーマ *thème*」になることもある。そしてその対概念として「レーマ *rhème*」という用語が発明された⁵⁾。その他、「トピック」—「コメント」というペアで表されることもある。これらの対概念をまとめると次のようになる。

旧情報 <i>ancienne information</i>	—新情報 <i>nouvelle information</i>
前提 <i>présupposition</i>	—焦点 <i>focus</i> (<i>foyer</i>)
テーマ <i>thème</i> (主題)	—レーマ <i>rhème</i> (評言、題述)
トピック <i>topique</i> (話題)	—コメント <i>commentaire</i> (評言、説述)

以下では、適宜、これらの用語を用いることとする。

3.2. 代名詞は旧情報である

例文 (1) に戻る。

(11) (=1) a. Je mets *ce tableau* sur le mur.

b. Je *le* mets sur le mur.

前節 (10) のように、ここでも (11a) の情報構造に対応する、いくつかの質問を仮定することができる。

(12) a. Que mets-tu sur le mur ? – Je mets *ce tableau* (sur le mur).

(何を壁に掛けているのか。——この絵を (壁に) かけている。)

b. Que fais-tu ? – Je mets *ce tableau sur le mur*.

(何をしているのか。——この絵を壁にかけている。)

ここでは、イタリックの部分が新情報を示している。

しかし、(11b)については、目的語を代名詞化したため、上のような質問の答えとしては不自然である。

(13) a. #*Que mets-tu sur le mur ? – Je le mets sur le mur.*⁶⁾

(#何を壁にかけているのか。——それを壁にかけている。)

b. #?*Que fais-tu ? – Je le mets sur le mur.*

(#何をしているのか。——それを壁にかけている。)

(13a)の会話は受け入れられない。なぜなら返事における代名詞「le」は、情報の重要な部分、すなわち「焦点」だからだ。同様に、会話(13b)もあまり受容可能とは言いきれない。それは、新情報を表すはずだと思われる部分に代名詞「le」が含まれているからである。これらの例が示すのは、代名詞が新情報を構成するのはおかしいということだ。

(11b)が受容可能となるのは次のような会話である。

(14) a. *Où mets-tu ce tableau ? – Je le mets sur le mur.*

(その絵をどこにかけるのか。——壁にかける。)

b. *Avec ce tableau, que fais-tu ? – Je le mets sur le mur.*

(その絵で何をするのか。——壁にかける。)

これらの会話では、それぞれの質問ですでに「その絵」が言及されており、その存在が前提されている。その結果、返事における代名詞「le」の導入はごく自然になる。

しかしながら、もしここで代名詞を用いなければ、それらの受容可能性は逆転する。

(15) a. #?*Où mets-tu ce tableau ? – Je mets ce tableau sur le mur.*

(#その絵をどこにかけるのか。——その絵を壁にかける。)

b. #Avec ce tableau, que fais-tu ? – Je mets ce tableau sur le mur.

(#?その絵で何をするのか。——その絵を壁にかける。)

なぜなら、各返事において、代名詞化されていない旧情報は重過ぎる印象を与えるからだ。

これらの例をみると、原則として、代名詞が旧情報を表すこと、その結果、ふつうは新情報を提示するのには用いないことが再確認できる。また以上のことから、文(11a)とその代名詞化を含む文(11b)とでは情報構造がかなり異なると考えられる。

3.3. 旧情報は左方、新情報は右方

ではなぜ代名詞を動詞の前に置くのか。それを説明するために、情報に関する我々の持つ談話的または語用論的な傾向を知ることが有効である。すなわち、我々はふつう、文を作る際に、旧情報を前方(文の左方)に、逆に新情報を後方(文の右方)に置く傾向がある。

(16) Qu'est-ce qui est arrivé ?

— a. Il a frappé une femme.

— b. #?Une femme l'a frappé.

(17) Qu'est-ce qui est arrivé ?

— a. Il a été frappé par une femme.

— b. #Une femme a été frappée par lui.

(16)(17) いずれも「何が起きているのか」という質問なので、文全体が新情報となる可能性が高く、それに対する答えは(a)(b)どちらもよさそうなのだが、実際には上のように異なる受容性の判断が出ている。すなわち、(16)(17)の会話は、主語に不定名詞句を置くことが難しく、反対に、代名詞を後方(右方)に置くことが不自然であることを示している⁷⁾。

つまり、不定名詞句はしばしば新出のものを表す新情報となり、代名詞は既

出のものを示す旧情報になるのが普通だからである。このように、情報価値と文内の位置との間には対応関係が見られることが多い。

また、この傾向を裏付けるために、主語がしばしば文の主題として機能することも付け加えることができる。つまり、文の左方に主語を置く方が、旧情報を示す主題の提示には適しているということになる。

3.4. 主題化

さらに、この傾向を立証するために、主題化操作を取り上げることもできよう。これは主題を強調するための「左方移動 *déplacement à gauche*」である。

- (18) a. *Paul regarde Marie.*
- b. *Paul, il regarde Marie.*
- c. *Marie, Paul la regarde.*

主題化という点については、(18a) は中立である。確かに、*Paul* が主題であることが最も可能性が高いが、それでもどちらも主題でないこともありうる。それに対し、(18b) では主題は *Paul* であり、(18c) では *Marie* である。

またこの主題化は、2つの要素について行われることもある。

- (19) a. *Moi, les pommes, je les aime.*
- b. *Le président, moi, je suis fier de lui.* (Salin et al., 1985, p. 32)
- c. *Sa physique, Paul, il la révisé !* (Arrivé et al., 1986, p. 671)

この2主題文については、次のような興味深い指摘がある⁸⁾。

- (20) 文の（1つまたは複数の）主題を分離するために語順を利用することができる：主題のハイラーキーは、分離された要素の左から右への継起に対応する。(Arrivé et al., 1986, p. 671)

すなわち、より左の主題 ((19a) *moi*, (19b) *le président*, (19c) *sa physique*) が、最も主題性が強く、2番目の主題 ((19a) *les pommes*, (19b) *moi*, (19c) *Paul*) は2番目のハイアラキーということになる。

この主題化の操作は、位置が情報価値と無関係でなく、前方(左方)の要素が旧情報になりやすいことをよく示している⁹⁾。

それに加えて、旧情報を左方(文の前方)に移動すると、新情報は自動的に後方(右方)にとどまることになる。

この情報構造はコミュニケーションを効果的にする。なぜなら旧情報を文頭に提示することによって、まず聞き手と共有する知識を再確認することができる。と同時に、これによって、あとに新情報を発することが知らされる。

このように、フランス語の補語代名詞の前置は、上述の「傾向」に適合している。代名詞は旧情報を提供するために動詞の前に移動され、同時に新情報を後方にまとめることになる¹⁰⁾。

3.5. 英語における同様の傾向

フランス語と異なり、英語では、代名詞を動詞の前に置くことはしない。しかし、この種の傾向が英語にもかなり体系的に観察される。

(21) a. He puts on *his overcoat*.

b. *He puts on *it*.

c. He puts *it* on.

(21a)の「*his overcoat*」を代名詞「*it*」で代名詞化した場合、(21b)のように「*puts on *it*」という語順を維持することはできず、(21c)のように「*it*」を「*on*」の前に移動して「puts *it* on」と言わなければならない。なぜならここにおいて、代名詞「*it*」は旧情報であり、重要性はないのに対し、前置詞「*on*」は、「脱ぐ*off*」のではなく「着る*on*」というパラディグムを表すという意味で、それよりも情報価値が高いからだ。

別の例を挙げよう。

- (22) a. I gave Meg *a book*.
 b. *I gave Meg *it*.
 c. I gave *it* to Meg.

(22) は二重目的語構文だが、同様に、代名詞化によって、(22b)« *Meg *it* » のように « *it* » を維持できず、(22c) のように « *it* to Meg » と言わなければならない。

このように、英語においても、代名詞（旧情報）は前方に置く傾向があり、必然的に重要な要素が後方に置かれることになる。

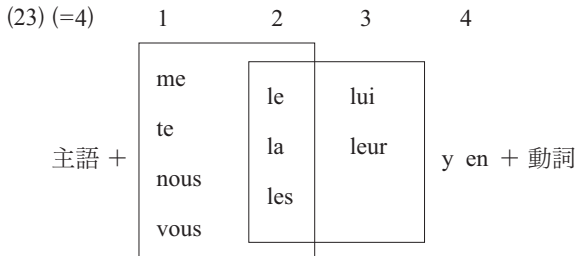
以上のことから、フランス語で補語代名詞を動詞の前に移動させることは、旧情報を文の前方（左方）に置く操作だと考えると決して特異なことではないと言える。

4. フランス語における代名詞の語順

もう1つ問題が残っている。フランス語の文において、代名詞化が複数の名詞句について行われた場合、それらの並べ方にある一定の規則があるということだ。この語順の理由は、いまだきちんと説明されていないように思われる。以下にそのしくみと理由を考えてみたい。

4.1. 代名詞の語順の体系

伝統的に、代名詞の順序は次のように図式化されていることは、§.2.1. (4) においてすでに述べた。



(23) によって、主語を除く代名詞のグループを左方から順にみていくと、内容が次のようになっていることがわかる。

- (24) 1. 第1、2人称の目的語代名詞 (me, te, nous, vous)
2. 第3人称の直接目的語代名詞 (le, la, les)
3. 第3人称の間接目的語代名詞 (lui, leur)
4. 副詞的代名詞 (y, en)

どうしてこのような順になっているのか。それを知るためには、久野の「共感」と「視点」の概念が有効だと思われる。

4.2. 共感と視点

久野 (1978, p. 134) によれば、文を発話するとき、我々は、その文のいくつかの名詞句 (行為主 actants) の1つに「視点」を置き、同化しているという。そしてこの同化を「共感 *empathy*」と呼ぶ。

この共感はいくつの文について1つの名詞句だけに置かれているとは限らない。しかし複数の名詞句に一律に置かれているのでもない。

4.2.1. 表層構造の視点ハイアラーキー

共感度には階層が存在する。

- (25) 文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合、即ち共感度を $E(x)$ で表わす。共感度は0 (客観描写) から値1 (完全な自己同一視化) 迄の連続体である。

——久野, 1978, p. 134

- (26) 一般的に言って、話し手は、主語寄りの視点をとることが一番容易である。目的語寄りの視点を取ることは、主語寄りの視点を取るのより困難である。受身文の旧主語 (対応する能動文の主語) 寄りの視点を

取るのは、最も困難である。

E (主語) > E (目的語) > E (受身文の旧主語)

——同書, p. 169, 326

また通常は、自分自身に共感（視点）を置くため、第 1 人称の共感度が第 2、第 3 人称の共感度よりも高い。

(27) 発話当事者の視点ハイアラキー 話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない。

1=E (一人称) > E (二・三人称)

——同書, p. 146

第 2 人称と第 3 人称については、第 2 人称が発話当事者の相手として会話の当事者になりうることを考えれば、視点ハイアラキーが第 3 人称よりも上であることは容易に想像できる。

4.2.2. 3 人称直接補語と間接補語

フランス語において代名詞が《直接目的—間接目的》という語順になることについては、直接補語の方が間接補語よりも共感度が高いという説明が考えられる。

しかし、いくつか問題がある。すなわち、

1. 第 1、2 人称と第 3 人称の組み合わせでは、《間接+直接》となる。
2. 間接目的（与格）が「人」になることが普通である。直接目的（対格）の「もの」よりも共感を持ちやすい。

1 については、「直接 vs 間接」の関係よりも、「第 1、2 人称 vs 第 3 人称」の関係の方が優先されるとすることで説明できる。

2 については、次の久野・高見の指摘が示唆的である。

同じ動詞が、同じ名詞句とともに、他動詞構文の「動詞+目的語（名詞句）」にも、自動詞構文の「動詞+前置詞+目的語（名詞句）」にも現われ得

る場合、動詞に隣接する目的語のほうが、動詞と離れた前置詞の目的語より、動詞の表わす行為の影響をより強く受けていると解釈される。

——久野・高見, 2013, p. 213

二重目的語構文は、主語指示物 (X) が間接目的語の指示物 (Y) の方向に直接目的語の指示物 (Z) についての当該の (動詞の表わす) 行為を行なって、YがZを受け取ったり、所有するようにし、一方、toを用いた構文は、主語指示物 (X) が前置詞の目的語指示物 (Y) の方向に直接目的語の指示物 (Z) についての当該の (動詞の表わす) 行為を行なって、ZがYに届くようにする、という意味を表わします。この点で2つの構文は、その表わす意味が若干違っているということになります。そしてこの違いは、二重目的語構文では、Yが動詞に隣接しているのに対し、toを用いた構文では、Yが動詞から離れ、到着点を表わす前置詞toの目的語であるという、両構文の形式の違いに起因しています。

——同書, pp. 215-216

つまり、前置詞のない目的語 (直接目的語) に比べ、前置詞のついたもの (間接目的語) の方が動詞の表す行為の影響が小さく、関係が希薄だという。したがって、2つの目的語が並ぶときには、行為と行為者 (actant) との関係が共感度に反映されると考える。

英語では、前置詞のない間接目的語 (与格) が可能である。

(28) a. John gave a book to the girl.

b. John gave the girl a book. (久野・高見, 2005, p. 104)

そのため、前置詞のない間接目的語 (与格) は、前置詞のある間接目的語から派生したものというとらえ方が操作上必要になる。それに対し、フランス語では、(a) の構文のみが可能で、(b) はあり得ないため、そういう配慮は不要である。

(29) *Jean donne la fille le livre.

4.2.3. フランス語補語代名詞の視点ハイアラキー

以上を踏まえた上で、(24)の補語代名詞の内容は、次のように書き替えることができる。

- (30) 1. 第1、2人称は、対話の場における大前提であり、対話の当事者が最もよく知っているもの。したがって、最も共感度が高く、逆に情報量が最も少ないものである。
2. 第3人称直接目的語は、行為が直接および対象として重要であるとともに、話し手が間接目的語より比較的親近感・共感を持ちやすい、または動詞の表す行為の及ぼす影響が強いものである。
3. 第3人称間接目的語は、行為が直接的に働く対象ではなく、行為の到達点として背景的な位置づけにあり、または動詞の表す行為の及ぼす影響が弱いため、直接目的語より比較的疎遠なものである。
4. 中性代名詞、副詞的代名詞は、状況補語を代名詞化したものであり、文の構成素としては上の3つに比べて周辺的な情報であり、したがって話し手にとって最も共感度が低いが、同時に上の3つに比べるとより情報価値を持っていると思われる。

このような説明は、すべての代名詞は旧情報を表すにもかかわらず、そこにも異なる共感度があり、さまざまな情報価値が生じることを示している。フランス語の代名詞の語順は、この共感度によく対応しており、より共感度の高い代名詞から、より共感度の低い代名詞へと、すなわちより情報量の少ないものからより情報量の多いものへと並んでいる。したがってこの語順は、情報価値と無関係ではない。

4.2.4. 補足

3人称直接目的補語に対して、間接目的補語が後に置かれる理由として、音の問題も考慮すべきかもしれない。

すなわち、フランス語だけでなく、言語一般に、いくつかの語を列挙する場

合、音声的に長いものが短いものよりも後に置かれやすいことが指摘されている。(Cooper & Ross, 1975 ; 山口, 2014)¹¹⁾

3人称間接目的補語 *lui, leur* は、この点で、直接目的補語 *le, la, les* に比べて長い。そのため、「**lui-le*», «**leur-la*» などよりも、「*le-lui*», «*la-leur*» などの方が明らかに安定している。

これは同時に、前節4の中性代名詞や副詞的代名詞に関して、「*y-en*» となるが「**en-y*» とならないことの説明にも有効であるように思われる。

5. 結論

本論において、我々は、フランス語の補語代名詞の前置、および複数の代名詞の語順のしくみを説明しようとした。伝統的な説明や、Duboisらの構造主義的な記述では、表面的な解説はされているが、その語順のしくみについては何も言及されていない。そのため、我々は、プラハおよびハーバードの機能主義者によって提唱された「情報」と「共感」の概念を用いることにした。

我々は、まず動詞の補語代名詞の前置という現象を取り上げ、この前置の理由を考察した。「情報」の概念により、文の情報構造が新情報と旧情報からなり、一般に、新情報は文の前方(左方)に、旧情報は文の後方(右方)に置く傾向があることを観察し、フランス語の代名詞の前置は、この傾向に合致したものであることを示した。

次に、動詞に前置された代名詞の語順の問題を取り上げ、その理由を考察した。ここでは久野によって提唱された「視点」「共感」の概念を援用した。「共感」という観点からは、情報的に古いものである代名詞でも、それらの間に情報価値の階層があり、その共感の程度(共感度)が高ければ情報価値が下がり、前方(左方)に置かれる。逆に、共感度が低いものは、情報価値が上がり、後方(右方)に置かれる。このように代名詞の語順のしくみが機能主義の概念を用いることでより明確に説明できることが分かった。

注

- 1) 本論文は、Ishino (2007) を見直し、修正加筆したものである。なお、レジュメ校正、および本文のフランス語の受容性判断は、Jean-Paul Honoré, Didier Chiche 両氏にお願したものを再利用した。ここにお礼を申し上げる。
- 2) ここで問題にしているのは、とくに、チェコのマテジウス V. Mathésius と、ハーバードの久野暲とその共同研究者である。
- 3) 単文においては、文頭の « * » は文が「受け入れられない」、「非文法的である」ことを、文頭の « ? » は「やや不自然である」ことを表すこととする。
- 4) 聞き手がある知識をもっているかどうかの判断は、話し手が行う。
- 5) プラーグ学派の用語である。
- 6) 文頭の記号 « # » によって、会話や文連続が「論理的に受け入れられない」ことを示す。文頭の « ? » は「やや不自然である」ことを表すこととする。
- 7) ここでは、「彼」に対して指差し行為が伴う場合は考慮に入れない。
- 8) Il est possible de mettre à profit l'ordre des mots pour détacher le (ou les) thème(s) de l'énoncé : la hiérarchie thématique trouve un équivalent dans la succession gauche-droite des constituants détachés. (Arrivé et al., 1986, p. 671)
- 9) この主題化の操作は、普通はその痕跡を代名詞としてもとの文に残す。これを厳密には、「転位」dislocation として区別することもある。その他に、強調構文などは「分離」détachement ということもある。本論文では、特にこだわらず、「移動」としておく。
「左方転位」が主題化だとすると、「右方転位」はどうなるか。Martin (1983, p. 219) は、次の例を挙げ、説明をしている。

(31) Pierre, les gendarmes l'ont arrêté ce matin. Il est fort inquiet, Pierre. (Martin, *Id.*)

前半の文では、« Pierre » を左に移動して主題化しているが、後半の文においては、« Pierre » を右に移動することによってこの主題をあらためて規定しなおしている。なぜなら主語の « il » がここでは曖昧になってしまったからだ。つまり右方転位によって、失われた、または忘れられた主題の確認を行っているのだ。

これを完全な「焦点化」focalisation (= 「新情報」化) とは言いにくいかもしれないが、少なくとも「(再) 焦点化」(re-)focalisation ということではできるのではないだろうか。

- 10) 新情報が後方に置かれやすいということは、以前から指摘されている。
「文中新情報をあらゆる最も重要な構成素が文末にひきのぼされる。音声言語では文末に音調の核が通例あらわれるのはそのため、この原則は単一文に適用されるばかりでなく、談話 (Discourse) にもあてはまる。主要なことを文末まで述べずにのぼしておくほうが、とくに文字言語の場合、読者に効果的な印象を与えるものである。こ

れを文末焦点 (End-focus) という。」(村田, 1982, p. 191)

11) これは同じく機能主義者たちの言う「文末重点」(End-weight) の概念にも通じるものがあるように思われる。

「文の構成素のうち比較的重みのある部分が文尾にもってこられる。さもないと文は幾分ごちなく響き、バランスを失う。構成素の長さなり、文構造の複雑さの度合いを考慮して文のバランスは決定される。これが文末重点 (End-weight) といわれるものである。」(村田, 同書, pp. 191-192)

Bibliographie

- Arrivé, M. et al. 1986. *La grammaire d'aujourd'hui : guide alphabétique de linguistique française*. Paris : Flammarion.
- 朝倉李雄 2002 『新フランス語文法事典』 白水社
- Cooper, W. E. & Ross, J. R. 1975. "Word order." *Papers from the Parasession on Functionalism*, CLS. pp. 63-111.
- Dubois & Lagane. 2001. *La nouvelle grammaire du français*. Paris : Larousse.
- 福地肇 1985 『談話の構造 (新英文法選書10)』 大修館書店
- Ishino, K. 2007. « Quelques notions fonctionnalistes et l'antéposition des pronoms en français. » 『人間言語の本質的特性に関する理論言語学、機能言語学、言語脳科学による統合的研究』(平成15年度~平成18年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)2課題番号15202011 研究代表者保阪靖人) 東京都立大学 pp. 53-62.
- 石野好一 2007 『フランス語を知る、ことばを考える』 朝日出版社
- 2010 「フランス語を知る、ことばを考える (公開講座「ことばの世界・世界のことば)」 『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報) 第2号 pp. 117-132
- 伊藤太吾 2006 『フランス語・イタリア語・スペイン語が同時に学べる本』 ナツメ社
- 久野暉 1978 『談話の文法』 大修館書店
- , 高見健一 2005 『謎解きの英文法 文の意味』 くろしお出版
- , 高見健一 2013 『謎解きの英文法 省略と倒置』 くろしお出版
- Martin, R. 1976. *Inférence, antonymie et paraphrase*. Paris : Klincksieck.
- 1983. *Pour une logique du sens*. Paris : P. U. F.
- 村田勇三郎 1982 『機能英文法』 大修館書店
- Noailly, M. 1990. *Le substantif épithète*. Paris : P. U. F.
- Popovici, V. 2014. « Le roumain. » *Manuel des langues romanes*. (Klump, A. et al., éd. Berlin : De Gruyter) pp. 289-312.

Riegel, M., J.-Chr. Pellat & R. Rioul. 1994,1998. (4e). *Grammaire méthodique du français*.

Paris : P.U.F.

Salins et al. 1985. *Nouveaux exercices de grammaire*. Paris : Hatier.

山口治彦 2014 「ゴロのいいことば—並列表現の音と意味—」『日本語学』2014年5月 pp. 18-27.

Sur l'antéposition des pronoms en français du point de vue fonctionnaliste

Koichi ISHINO

Résumé

Dans cet article, nous avons cherché à présenter l'efficacité des notions d'« information » et d'« *empathy* » proposées par les linguistes fonctionnalistes de Prague et de Harvard pour expliquer quelques phénomènes grammaticaux en français.

Dans ce but, nous avons traité d'abord du phénomène de l'antéposition des pronoms compléments de verbe, et essayé d'expliquer la raison de cette antéposition. Pour l'expliquer, nous nous sommes servis de la notion d'« information », et avons observé que la structure informationnelle de la phrase consiste en une nouvelle information et une ancienne information et qu'on a tendance à mettre la nouvelle information en position avant dans la phrase, et l'ancienne information en position arrière. L'antéposition des pronoms français est donc conforme à cette tendance.

Ensuite, nous avons réfléchi à la raison de l'ordre des pronoms antéposés (ou clitiques) de verbe. Pour le savoir, nous avons invoqué la notion d'« *empathy* » proposée par Kuno. Du point de vue de l'*empathy*, l'ordre des pronoms correspond à la hiérarchie de l'*empathy*, et bien que les pronoms soient informationnellement anciens, on y voit une hiérarchie de la valeur d'information.